
百物語の結果

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百物語の結果

【Nコード】

N9841E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

江戸時代の大阪。百物語をしようと思いついた若者三人が最後に見たものとは。百物語はその最後に何かが起こると言われています。

第一章

百物語の結果

「やってみるか」

「そやな」

大阪での話だ。町人の若者達が長屋の外であれこれと話している。見れば三人いていずれもわりかし洒落た服装をしている。少なくとも江戸より派手だ。

「丁度暇やし」

「やってみよか」

「ああ。じゃあ蠟燭用意しようで」

話が決まると早い。三人のうちの一人、出っ歯の若者が蠟燭を出してきた。

「百本やる？」

「そや、染吉」

一重瞼の若者がその出っ歯の名前を呼んで答えた。

「百本や」

「わかった。ほな百本やな」

「ああ。それで朝太」

一重の若者は団子鼻の若者に声をかけてきた。

「御前は何を出すんや？」

「わしは本借りてくる」

「本か」

「そや、貸本な」

当時は本は高価なものだった。だから庶民は大抵貸本を借りて読んでいたのである。これが中々繁盛していて人気商売だったのだ。

「それ借りてくるわ」

「わかった。じゃあ頼むで」

「でや、権助」

染吉が団子鼻の若者の名前を呼んできた。

「ああ。俺やな」

「部屋は御前の部屋でええな」

「おとんとおかんは丁度今江戸に行つとるしな。丁度ええな」

「そや、じゃあ部屋は御前で」

「蠟燭は御前で」

「本は俺や」

染吉と権助と朝太はそれぞれ言うのだった。彼等は何かをしようとしていた。

「百物語か」

「話には聞いとるけどな」

染吉と朝太は少し考える顔で述べてきた。

「どうなるんやろな」

「何が出るんや？」

「それはやつてからのお楽しみやな」

権助が二人に言うのだった。

「鬼が出るか蛇が出るか」

「幽霊かな」

「それもあるで」

百物語をすることを考えていたのだ。百話終わったその時に何が起るのかということに興味があったのだ。それで行うことにしたのである。

「とにかく。何が出るか見ようか」

「そやな。何が出るかわからんし」

また口々に言い合う。

「それが楽しみやな」

「ひよつとしたらや」

ふとした感じで朝太が二人に言ってきた。

「鬼が出て来てわし等頭からバリバリついていかれるんかな」

「そうなたらどうする？」

「どうするって御前そうになったら」

権助は今一つわかつていなかったが染吉は少し考えてから述べる。

「その時はその時は」

「そうか」

「そや。その時はもう出たら逃げる」

結論はそれであつた。

「大阪人はそやるが」

「まあそやな」

「侍とちやうしな」

大阪は町人の町だ。武士は殆どいない。武士を一生の間全く見たことのない者すらいる。そんな彼等が武士の様に生きることはないのだ。

「じゃあ逃げるか」

「それが一番やな」

「そういうことだな」

これで話が決まつた。かくして彼等は権助の長屋の部屋に集まり百物語をすることになった。染吉の持つて来た蠟燭に一本ずつ火を点けてそれを車座に囲んだ三人の周りに置き朝太が借りてきた本に書いてある話を回し読みしていく。それが一話一話終わるごとに蠟燭の火を一本一本消していく。蠟燭の火は少しずつなくなっていく気が付いた頃にはもう最後の一本になっていた。

第二章

「何や、随分早いな」

「もう最後の一本かいな」

権助と朝太が言う。夕方にはじめて何日かやってそれがもう終わりに近付いている。二人はそれを見て言うのであった。

「さて、それはそうとあと一本」

「これが消えたら」

「何が起こるかやな」

染吉も二人に対して言ってきた。今は真夜中であり灯りはその最後の一本だけだった。これさえ消えればもう灯りはなくなる。しかし三人はそれでも平気な顔で笑っていた。

「ほんまに鬼出るかな」

「それとも大蛇が」

また鬼か蛇かだった。

「それが楽しみやな」

「食つような奴が出たら逃げるか」

「一応これは持って来たわ」

染吉がこう言つて塩を出してきた。言つまでもなく退魔の塩である。

「これ投げて逃げるか」

「そやな。これが切り札になるな」

「その時はな」

こう言い合つてからやっと本題に入る。その最後の話だ。それが終わり遂に最後の蝋燭の火が消された。部屋の中が真っ暗になったその瞬間だった。

「！？何か出たで」

「ああ、これは」

まず出て来たのは。なめくじだった。なめくじといつてもその大

きさはかなりのもので人と同じ位の大きさがある。異様ななめくじである。

「なめくじ!？」

「ひよっとしたらこれがか」

「こう思っていたら次は。蛙が出て来た。」

「今度は蛙やで」

「ああ」

やはり人と同じ位の大きさがある。巨大な蝦蟇蛙であった。

「なめくじに蛙っていうとや」

「出て来るのはやっぱり」

三人が予想すると。それが見事に当たったのだった。

蛇であった。これまた実に大きな大蛇がとぐるを巻いていた。その姿で三人の前に姿を現わしたのだ。

これで三つ出揃った。しかも三人を囲んで。ここで彼等はあることに気付いてしまったのだった。

「おい、まずいで」

「まずいな」

染吉の言葉に朝太が頷く。

「このままじゃ俺達出られないぞ」6

「どうする？」

「塩使うか？」

権助が言ってきた。

「今こそ塩を使ってやな」

「塩でどうするんや」

「なめくじや」

彼はなめくじを指差して言う。

「なめくじにかけてしまえ。それで溶かして」

「あほっ、それやったらあかんやろが」

染吉が彼を叱ってきた。

「なめくじに塩使ってどないするんや」

「なめくじいうたら塩やるが」

しかし権助はなおも言うのだった。

「そやから塩をやな」

「それでなめくじ消したらどうなるかわかっとなるんや」

「そやそや」

朝太も参戦してきた。しかし権助はまだわかっていない。

「何かあるんか？」

「こつ言う始末だ。やはりわかっていない。

「あるに決まってるやる。なめくじ消すやる」

「ああ」

「蛇が暴れるわ」

それであった。なめくじは蛇の天敵なのである。だから蛇は動かない。そのなめくじがいなくなればどうなるのか、もう言うまでもないことだった。

「そしたらわし等三人一呑みやぞ」

「そうなつてもええんか」

「そか」

「そや」

「だから止めとけ」

「ほなここに酒があるな」

染吉が百物語をする間飲んでいた酒を出してきた。

「これで蛇をやな。酔わせて」

「御前わかっとなるんか」

「人の話聞けや」

しかし今度は朝太と権助が言ってきたのだった。

「蛇に吞まれるよりましやる。酒は勿体ないがな」

「蛇おらんようになったらどうなるねん」

「考えてみい」

しかし二人はなおも言う。

「どうなる？蛇がおらんと」

「蛙が楽になるな」

染吉もそれはわかっている。

「それでつまり」

「蛙が暴れるやろが」

「やっぱりわし等一呑みやぞ」

「そつやな、そついえば」

「だからそれは絶対すんな」

「ええな」

かくしてこれも駄目であった。今度言ってきたのは最後の一人朝太であった。

第三章

「じゃあ火を点けて蛙追っ払ってまえ」

「蛙をか」

「そや」

今度言い出したのは蛙に対してだ。蛙が怖がる火を使うというのだ。

「それで逃げさせい。道が空くで」

「それもあかん」

「全然や」

これも駄目であった。今度は染吉と権助が止める。

「あかんのかいな」

「蛙おらんなめくじが暴れるわ」

それであった。次はなめくじであった。

「なめくじに喰われるぞ」

「わし等三人皆殺しやぞ」

「これもあかんのかいな」

「あかんや」

「つまりや」

ここであることがわかった。

「わし等はこのままずっと三匹に囲まれて」

「ここにおるんか!？」

こういう結論になるのだ。結論に達しても全く嬉しくはなかった。それどころか、である。

「どうしたらええんや」

「出られるんぞ」

三匹が睨み合う間だ。どうしようもなかった。

「下手に動いたらまずいな」

「というか隙があらへん」

まされにそれであった。

「出るどころやないで」

「じゃあこのままかいな」

「そうかもな」

「そうかもなつて御前」

幾ら言い合つたところでもどうにもならなかつた。そんな状況だつた。

「このままやつたら」

「じゃあどないすんねん」

権助は真顔で染吉に問う。

「どうしようもないやろ」

「これが百物語かいな」

三人はここでそれがわかつたのだつた。

「何ちゆうこつちや」

「どないせえつちゆうねん」

「しかし。このままやつたらわし等」

「ああ」

どうなるかはもう言うまでもないことだつた。

「飢え死にかいな」

「けど出るに出不れんしなあ」

「難儀なことになつたわ」

しかしどうしようもなく結局三すくみの中から出られないのだつた。三人がようやく出られたのは三匹が消えた一週間後だつた。その時にはまさに飢え死に寸前で長屋の部屋から這つて出て来たのであつた。まさに惨状だつた。

だがこの話は大阪では自業自得として瞬く間に広まり。おかげで三人は笑いものであつた。

「おい、あいつ等や」

「ああ、あれが噂の」

「あほ三人かいな」

こう言われる始末だ。誰も同情しない。そのかわりに笑いものになる。三人にとっては最悪な状況であった。

おかげで三人は暫くの間大阪で肩身の狭い思いをすることになった。うどんを食べてもそれは同じで。店屋でも客はおるか店の者にまで言われる始末だった。

「ほんまあんた等あほなことしたもんやで」

「命が助かっただけでもめつけもんやぞ」

擦れ違う人にそれぞれ言われる。おかげでうどんがまずい。そのまずいうどんを食べながら話すのであった。

「えらいことになったわ」

「ほんまや」

小さくなつてひそひそと話をしている。

「周りが皆言うなあ」

「これ、当分続くで」

「当分かいな」

「多分あれや」

ふと朝太が言う。

「百日は続くわ」

「百日かいな」

「そや、百物語をやったんやで」

二人に対して答えて述べる。

「それやったらやっぱり」

「七十五日やなくて百日かいな」

「その間我慢するしかないやろな」

「そか。それにしても」

権助のぼやきが出る。

「ほんま、難儀なことになったで」

「百物語の呪いやな。三すくみには巻き込まれるし散々やで」

「その通りや」

二人は染吉の言葉に困った顔で頷き。最後に三人で言い合う。

「これこそがまさに」

「そやな。百物語の」

「顛末、呪いや」

こう言い合うのだった。大阪であった話だ。三人は本当に百日の間言われ続けこれもまた百物語の名前の由来になったとも言われているとされているが実際のところはどうかはわからない。

百物語の結果 完

2008・5・19

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9841e/>

百物語の結果

2010年10月8日15時04分発行